

M・エンデの環境問題 に対する見解について

——メルヒェン『魔法のカクテル』を手がかりに——

近 藤 悟

1. はじめに—エンデの社会批判

ドイツの児童文学作家ミヒャエル・エンデ(Michael Ende)は、『モモ』*Momo* (1973)において資本主義がもたらす社会の様々な荒廃について、社会批判を行った。また、ファンタジー作品『はてしない物語』*Die unendliche Geschichte* (1979)や晩年に書かれたオペラ作品『鼠捕り男—ハーメルンの死の舞踏』*Der Rattenfänger. Ein Hamelner Totentanz* (1993)においては、人間の心の荒廃について読者に訴えかけた。社会の荒廃は、人々の心の荒廃によって起こるからだとして、エンデは常々考えていたからである。しかしながら、これらの作品は、ヘルマン・バウジンガー(Hermann Bausinger)が『モモ』について指摘したように、その社会批判の内容が具体性に欠けており、「道徳的に抽象的」⁽¹⁾なのである。そのため、「戦後四十年の現代文学においては、作家は読者を啓蒙し、知られざる事実のあれこれを知らしめる」⁽²⁾風潮に沿わないエンデの作品は「ノンポリ的逃避文学」⁽³⁾として、批判されていた。しかしながら、エンデは「そういう創作態度を大いなる思い上がりだ、と断じます」⁽⁴⁾と、逆に非難している。「政治的な手法は、既にできあがっている不幸に新しいものを追加するだけだ」⁽⁵⁾という考えが、エンデにあるのではないかとカミンスキ(Winfred Kaminski)は指摘している。しかし、「生涯、『国民のメルヒェンおじさん』(Märchenonkel der Nation)の役割を負わされた」⁽⁶⁾エン

デの作風は「道徳的に抽象的」である「ノンポリ作家」との固定観念が出来つつあった。エンデは『エンデのメモ箱』*Michael Endes Zettelkasten. Skizzen & Notizen* (1994) に収録されている『ある中央ヨーロッパの先住民の思い』*Gedanken eines zentraleuropäischen Eingeborenen* の中で、そのような風潮を先住民に以下のように語るものである。

確かにファンタジー文学は現実逃避的で、それゆえ価値がないと見なされているが、世間の期待通りに精神病的で、ショッキングで、少なくとも猥褻でありさえすれば、それでも、一風変わったものとして認めてくれる。[…] 写実主義の児童文学を、ためになるとか、教育的に作用するという理由で認めている気のいい宣教師は、ファンタジー文学の前ではあきれてものが言えなくなるのが常なのである。⁽⁷⁾

エンデは環境汚染や自然破壊について社会批判をすることに対しては「なんの役に立つのか？」⁽⁸⁾と疑問を呈している。しかし、エンデはそうは言いながら、「戦後」と呼ばれる時代が過去のものになりつつある現代においても、「第三次世界大戦」*Der dritte Weltkrieg*⁽⁹⁾は始まっているとして、核の問題や環境問題について具体的に発言をしてきたのである。エンデは『論理的帰結 あるサイエンス・フィクションの構想』*Die Konsequenz. Entwurf einer science-fiction-story* の中で、文明が将来さらに発達し、ひょっとすると「どの高校生でも遺伝子工学的に独自の全人類に対する疫病を作れ、誇大妄想の指導者が、地上の全ての生命を消滅させることができる独自の原子爆弾を作れる」ようになることで、「全ての嫉妬深い自殺願望者は全人類を脅迫する」⁽¹⁰⁾ことが可能になってしまう未来に警鐘を鳴らしている。

しかしながら、やはりエンデの「国民のメルヒェンおじさん」的態度は以下のような自身の考えによって肯定されてしまうとも考えられるのではないか。

幾人かの啓蒙テロリストたちが、私が子どもの目を現実からそらすと叫

ぶ。その危険を冒してでも、私は子どもにもコートを与えるか、ことによると、暖かい暖炉のそばに連れて来ることの方が正しいと私は思う。というのも、現実とはまさに寒さであると、彼らは言うからである。[…] 子どもたちが美しいと感じたり、愛することができたりするものを児童図書は読者に提供するべきなのである。これ以外に重要なものはない。というのも、児童図書によって子どもたちは、精神的な栄養を摂取するからである。(11)

さらにエンデは、ゲーテの言葉「永遠に女性的なるもの」の脇に「永遠に幼きもの」(das Ewig-Kindliche)という言葉を慎ましやかに脇に置くことを許してほしいと、ある講演会で話している。「『永遠に幼きもの』がなくては、人は人でなくなる」(12)と考えていたからある。

2. エーリヒ・ケストナーの場合

エンデの言う「永遠に幼きもの」の重要性をエンデと同じように考えていたと思われる児童文学作家がドイツに他にもいた。エーリヒ・ケストナー(Erich Kästner)である。彼は第二次世界大戦開戦前には、風刺詩人としてだけでなく、「エーミールと探偵」*Emil und die Detektive* (1929)、「点子ちゃんとアントン」*Pünktchen und Anton* (1931)といった児童文学作品で高い人気を博していた。彼の作品においては、ドイツの古きよき時代の雰囲気を感じられ、モラリストとしての彼の態度が、子ども向けの文章の中から十分に読み取ることができるのである。

ケストナーは、第二次世界大戦前にナチスが台頭してくる不穏な時代に、少しでも児童文学によって暗い心の中に潤いを戻してもらおうと願って『5月35日』*Der 35. Mai* (1931)を執筆した。主人公である少年コンラート(Konrad)は、宿題に出された作文について悩む。

「算数が得意なものはみんな、南洋のことを書かなくちゃいけないんです。僕たちには空想力がないという理由で。」⁽¹³⁾

このことをきっかけとして、コンラートの叔父であるリングルフート(Onkel Ringelhuth)と言葉を話す馬の三人で南洋を目指して冒険をする話であるが、その中には文明に対する風刺も散りばめられている。何もかも自動式で、働くことをしなくなった「電気の都市」の住民の口を通して現代にも通じる風刺が行われている。

「私は時々歴史書を読みます。昔の人々がどんなにめんどくさいことをしていたのか、ということを知るのはきわめて興味深いことなんです。」⁽¹⁴⁾

携帯電話や自動操縦の自動車、動く歩道なども作中登場するが、ケストナーの先見の明には驚かされる。ただ、その「電気の都市」も電気の供給源である「ナイヤガラ」の氾濫のため、都市の発電所が百倍もの力で動き出したため、大惨事が始まる。⁽¹⁵⁾その結果、町は破滅してしまう。ケストナーは馬に以下のように語らせる。

「忌々しくて厄介なものだな、技術なんて。」⁽¹⁶⁾

これは単に文明の発達によるものに対する風刺であるだけでなく、軍国化していくドイツの技術の発達による軍事産業の発展をも暗に揶揄していると考えることができる。その後、ケストナーはナチスが政権の座に就くと、ナチスの思想に非協力的として「禁止作家」となってしまう。多くの作家がドイツから脱出し、亡命していくなかで彼はドイツに留まる。ナチスが崩壊していく様を目撃しようとしたのだ。

戦後、彼はドイツに留まった作家として声高に、核の廃絶と平和を訴える。戦後4年を経て発表された彼のカムバック作品『動物会議』*Die Konferenz der*

Tiere (1949) は、挿絵の愉快的な寓話であるが、動物たちの発言は、非常に具体的に読者に訴えてくる。再軍備を始めようとしている人間たちについて、象のオスカルは以下のように言う。

「数百年来どこでも戦争と貧困とバカなことばかりだ。[...] ただ一部の人間がそれを教訓にしないのだ。彼らは政治をし、おしゃべりをし、会議をひらいている。」⁽¹⁷⁾

「心配しなくてもいいよ！ [...] きっと世界を正常な状態にしてみせるよ！なんといってもわれわれは人間じゃないからね！」⁽¹⁸⁾

そして動物たちは召集され会議を行う。動物たちは、国境や軍隊の廃止、教育者を優遇して子どもを立派に育てることといった要求を政治家に突きつける。しかし、動物側の要求を人間の政治家たちは突っぱねたため、動物は子どもたちを「平和的に誘拐」する。象のオスカルは子どもを持つ親や政治家に向けて以下のような声明を出す。

「君たちの政治家は、われわれが愛する人間の子どもやわれわれが気がかりである子どもたちの将来をくり返し、新しいけんかや戦争や悪巧みや貪欲さによって、危険にさらし破滅させている。」⁽¹⁹⁾

寓話ながらも、ケストナーは象のオスカルに言葉を託し、力を緩めず、強く社会批判を行っている。ここからも分かるようにケストナーはたとえ児童文学であっても、啓蒙的観点を重視している姿勢が文章から読み取ることができる。モラリストとしてのケストナーの態度である。では、エンデの社会批判は「道徳的に抽象的」で、社会に対して啓蒙的な態度ではなかったのか。エンデの戯曲『魔法のカクテル』*Der satanarchäolügenialkohöllische Wunschpunsch* (1989)⁽²⁰⁾ は、ケストナーの『動物会議』と同じく、動物が主人公になってい

る作品である。この作品を用いて、エンデの現代の社会批判についてさらに考察していきたい。

3. 環境問題に対するエンデの警鐘

エンデは、もともと俳優修行をしながら劇作家になることを夢見ていた。児童文学作家として『ジム・ボタン』*Jim Knopf* (1960/1962)の成功後、戯曲『遊戯をだめにする者 あるいは愚者の相続遺産』(邦題:『遺産相続ゲーム』)*Die Spielverderber oder Das Erbe der Narren* (1967)を執筆する。しかし、当時の演劇界においていわばスタンダードとなっていたブレヒト劇のような手法をとらなかったために—エンデはブレヒトを多少は意識していたのであるが—講演初日に失敗作との烙印を押されてしまう。そのため、劇作から遠ざからざるを得なかった。その後、10年以上を経て、戯曲『サーカス物語』*Das Gauklermärchen* (1982)⁽²¹⁾、オペラ作品『ゴッゴローリ伝説』*Der Goggolori* (1984)を発表するが、この『魔法のカクテル』は「[...] エンデが劇作家になりたかったという意味では彼の原点に戻った」⁽²²⁾作品であるとローマン・ホッケは指摘している。さらにホッケは『魔法のカクテル』について、「多くのしゃれや、エンデ特有のこぼ遊び、そして高い娯楽の価値、皮肉たっぷり世界を批判している意味深長なお話である。環境破壊や『悪』による『善』の操作という時宜にかなったテーマは、象徴的に主題として扱われている。そのようなテーマを魔法の世界に置き換えているのである」と評している⁽²³⁾。

悪魔と契約した魔術師イルヴィツァー (*Irrwitzer*)⁽²⁴⁾が、大晦日に悪事のノルマを達成しようと、同じく魔術師の叔母ティラニア (*Tyrannja*)⁽²⁵⁾と願いが叶うカクテルを作ろうとする。「動物上級評議会」から送り込まれたネコとカラスが、その計画を阻止しようと奮闘する筋書きである。52章にわたる各章は、大晦日の17時から新年0時までを細かく分刻みで分けられており、場面の展開が非常にスピーディーに感じられる作品となっている。

悪魔と契約した魔術師イルヴィツァーは、一年間に次のようなことを発生さ

せなければならない。1. 「十種類の動物を絶滅させること」、2. 「五つの河川、あるいはひとつの川を五回汚染させること」、3. 「少なくとも一万本の木を枯死させること」、4. 「人間、または動物あるいは両方を同時に殺す伝染病を、毎年ひとつは流行させること」、5. 「自分の国の気候を支配し、季節を混乱させ、干ばつあるいは洪水を起こすこと」。(WP 17) しかし、魔術師は大晦日の日までにこれらのことを実行できずにいた。悪魔の使いは魔術師を咎めるが、魔術師は、「遅かれ早かれ敵に気づかれることなく、始められる全滅戦争はないんだ。」(WP 18) とやり返す。しかし、契約が履行されない場合は、魔術師イルヴィツァーは命を落とすこととなり、同様に悪魔の使いに脅された叔母ティラニアと共に何でも願いごとが叶うカクテル作りに残された時間を費やす。作中使用されることばの多くに現在、我々が環境問題などを意識する際に多く使われる単語が非常に多く使われていることに注目したい。エンデの死後、21世紀に入り、これらのことばがマス・メディアなどで日常的に多用されることとなった現実を鑑みて、エンデの警鐘が伝わっていない現実に我々はいかなる反省をするべきか考えさせられる。あるいは、現実問題として手遅れであると考える論者もいることであろう。

魔術師イルヴィツァーがこれまでに犯した「ますます生き物が病気になり、木々が枯れ、河川が汚染される」事件に対して、「だれかによって、もしくは何かによって引き起こされている」という疑問を持った「動物上級評議会」によって大きな会議が持たれた結果、その原因を探るために「動物上級評議会」は「あちこちに秘密諜報部員を送り込む。」(WP 37 f.) 魔術師イルヴィツァーのところにはネコのマウリツィオ (Maurizio)、魔術師の叔母ティラニアのところにはカラスのヤーコブ (Jakob) がスパイとして送り込まれる。

エンデは晩年、金融システムにこそ問題があり、その問題を解決しなければ現在社会の諸問題を解決できないとくり返し述べている。拙稿において既に指摘しているが⁽²⁶⁾、エンデは「どう考えてもおかしいのは資本主義体制化の金融システムではないでしょうか。人間が生きていくことのすべて、つまり個人の価値観から世界像まで、経済活動と結びつかないものはありません。問題の

根源はお金にあるのです。』⁽²⁷⁾と発言している。『鏡の中の鏡』*Der Spiegel im Spiegel* (1984)の中に収められている短編『土塊の上に建つ駅舎教会』*Die Bahnhofskathedrale stand auf einer großen Scholle* や『鼠捕り男ーハーメルンの死の舞踏』などの作品において、全てのものの価値観が全てお金に基づくものであることをエンデは批判している。彼は『魔法のカクテル』においても、富と強欲の神マンモン (Mammon) の名を挙げ、象徴的な存在としてティラニアが金庫の扉を開ける際、以下のような呪文を彼女に語らせる。

おお、マンモン、この世を統べる王者
 おまえは人間と事物を支配する！
 無から絶えず金を創造する者、
 金があれば、なんでもできる (WP S. 80 傍点は筆者)

また、魔法のカクテルを作る材料においても、同様に現代の経済システムに対する風刺が読み取れるのである。

今度いるのは液状の金
 この世の中の貧乏人から搾り取った金
 一万ターレル投資しろ
 その利子だけを液体にして
 -3.25 ℓの利子だ
 それをコップに注ぎこめ、
 合法的に見せかけろ！ (WP. S. 139 傍点は筆者)

上述の呪文のように象徴される現在の資本主義制度を批判しているエンデであるが、現在世界各地で問題視されている食料やエネルギー格差の問題にも通じる指摘と考えることができる。我々の周囲に現在起こっている事柄の多くが、目に見えず、徐々に忍び寄ってくることもエンデは次のように指摘し、読者に

問題提起をしている。

魔術師イルヴィツァーの住む「悪夢屋敷」(die Villa Alptraum)を取り囲む、「死の公園」(der Tote Park)にある見えない障害物。その障害物は、「忘却」,「悲しみ」,「混乱」からできている。「死の公園」に植えられている木々は、かつては美しかったのだが、魔術師イルヴィツァーの手によって、科学的な実験が施されている。つまり木々は、「成長を操作され」,「繁殖力を弱められ」,「生命の源を搾り取られ」た上に、「ゆっくりと一本一本拷問にかけられ殺された」のである。これらの木々の姿は「死の直前に悲痛な身振りで助けを求めているかのように、枯れて曲がった枝を天にのぼしている」のだが、「だれひとり木々の無言の叫びに耳を傾けるものはいなかった。」(WP. 130 f.) 現在の我々を取り巻く環境問題に置き換えて考えてみれば、この一節は、我々が環境に対する負荷に気づくのがすでに遅れていることを指摘していると考えることができるのである。

さて、魔術師イルヴィツァーは、悪魔の契約を新年までに履行するために、何でも願い事が叶う「願いのカクテル」(der Wunschpusch)に全てを賭ける。このカクテルは「大晦日の夜だけに効力を持ち」(WP S. 87), 自分の願いと反対の事柄を折れば、自分の願いが叶うというものである。しかし、「カクテルは、新年の鐘の一番初めの音によって願いを反対に作用させる力を失う。」(WP S. 98) 従って、新年までに全ての願いを言っておかなければならないため、どたばた劇の様相を呈しながら、魔術師イルヴィツァーと魔術師の叔母ティラニアは、なんとかカクテルを完成させる。そして、新年も近い11時15分からカクテルを飲みながら呪文とともに願いごとを並べ立てる。以下はそのうちのいくつかを引用している。逆に願わないと効力を持たないために、語られていることは至って当然な願いごと聞こえる。魔術師の立場ではなく、作家エンデの立場から見れば、これらは彼の願いが読者に対して非常に具体的に語られていると考えることができる。

カクテルの中のカクテルよ、／私の願いをかなえておくれー／森にある枯

れかかっている一万本の木が／もう一度芽を出しますように

カールシュラーク (Kahlschlag)⁽²⁸⁾株式会社の株が／もう上がりません
ように／トイレに使う紙にふさわしくなりますように

エルベ、ヴェーザー、ドナウにライン川／そして他のどの川も昔のように
きれいで／魚でいっぱいにしておくれ、／むかしよりもきれいにしておくれ

アザラシの皮や象牙で、／この世の最後の鯨の肉で／商売するやつらは、
くたばってしまえ

スモッグとガスによって乱された暖かい季節、寒い季節／再びもとどおり
になりますように／それぞれの季節らしくなりますように

戦争を引き起こすために／民族争いや人種争いをあおるやつ／金儲けのため
に武器で商うやつ／破産してしまえ

この国の自慢である豊かさが／楽しみのために作り上げた豊かさがー
[…]／他民族の困窮によるものでないように／他民族の困窮の代償でない
ように

風と太陽 使いましょう／風と太陽は力を生み出しますよ

子どもたちに希望や喜びが、もたらされますように／未来の世界への信頼
を／子どもたちの身も心も害されませんように／子どもたちの幸せがお金
より大切にされますように！ (WP. S. 211 ff.)

このような魔術師イルヴィツァーやティラニアに語らせたエンデの訴えは、

非常に具体的で明瞭である。先述したような「道徳的で抽象的」ではない願いが発せられている。エンデはこれまでは『ファンタジー／文化／政治 ある対話の記録』（邦題：『オリーブの森で語り合う』）*Phantasie/ Kultur/ Politik. Protokoll eines Gespraches*（1982）や『芸術と政治をめぐる対話』*Kunst und Politik. Ein Gesprach*（1989）などの対談やインタビューにおいては、熱心に且つ具体的に彼自身の社会に対する訴えを発言してきたが、作品において、上述のように具体的に表されたのは、この作品以外にはないのではないだろうか。『芸術と政治をめぐる対話』において以下のようにエンデは訴えている。

現在われわれが使っているすっかり古くなった貨幣制度は、生産方法、交通手段や情報伝達手段、そして全ての経済的なプロセスが完全に変わってしまっているにもかかわらず、数世紀以来全くその構造が変わっていないのです。貨幣の独自性と経済的な現実との間には、致命的な矛盾が絶え間なく生じています。環境破壊から、インフレ、第三世界の搾取を経て、戦争の勃発に至るあまりに致命的な結果を、この矛盾が導くのです。⁽²⁹⁾

これと同様の事柄を『魔法のカクテル』の中に具体的に表現していることは、「逃避文学的」と言われ続けたエンデの執筆態度から考えれば非常に異例のことといえる。しかしながら、冒頭で引用したとおり、エンデは環境汚染や自然破壊などの諸問題について社会批判をすることに対しては「なんの役に立つのか？」と語っている。この作品においてはエンデが現代社会の憂慮すべき問題点を羅列しただけに終わるのだろうか。魔術師イルヴィツァーたちの悪行を食い止めた動物たちの行動から、エンデの環境問題などを解決するための方策を考察してみたい。

4. おわりにー社会問題の解決策

魔術師の悪巧みを、新年の鐘によってその効力を失わせることができると知

ったネコのモーリッツとカラスのヤーコブは、教会へ行き鐘を早く鳴らしてしまおうと画策する。(Vgl. WP S. 143) しかし、教会の塔に現れた聖人、聖ジルヴェスターによって阻まれる。というのも、新年の鐘を新年が来る前に鳴らされては困るという聖ジルヴェスター側に当然の理由があったからである。そのため、問題の解決方法として、ネコのモーリッツとカラスのヤーコブは、聖ジルヴェスターに奇跡を起こして欲しいと懇願する。結局のところ、魔術師から世界を救うために、彼らは聖ジルヴェスターから「鐘の音」を渡される。教会の鐘を鳴らすのは無論、新年になってからであり、その対応に苦慮した聖ジルヴェスターの救済の策である。それは「氷晶の中で輝き、きらめく、ある音符の形をした神々しい美しさの光」(WP S. 189) であり、魔術師たちの願いの効力を失わせる力を持っているのである。氷晶を渡されたヤーコブとモーリッツは、魔術師たちが願いを唱え始める前に予めカクテル鉢にそれを入れておく。新年が訪れる「その瞬間、冷たい火でできた空になったカクテルグラスから力強い青銅の鐘がひとつ鳴り響き、グラスが粉々になった」(WP S. 230) ことによって魔術師たちの願いは、そのままの形で実現したのである。

このようなメルヒェンにおける社会問題の解決方法としては、ハッピー・エンドで終わるのが常套手段である。しかしながら、現実の社会に照らし合わせてみたときには、現実を変革させる契機となるであろう聖ジルヴェスターの存在は、非常に寓話的であり、現実世界に対して「奇跡」を求める困難さをエンデは暗示していると考えることができる。というのも、現実社会においては「科学や啓蒙され、自信のついた人間性は、神や悪魔を同様に拒否している」⁽³⁰⁾ 傾向が非常に強くなっているからである。科学技術の進歩によって、人間の心の中で善と悪が対立する図式が崩壊している現代においては、端的に言ってみれば、いわゆる「困った時の神頼み」的なエンデの社会問題の解決方法は、現実には「たとえだれかが話してもせいぜいメルヒェンだと思われるのさ」(WP S. 234) と語らせる程度のものである。エンデは以下のように語る。

多くのものが説明できるものとなり、また多くのものが説明される必要が

ありました。しかしながら、説明が可能であることや純粋な合理的思考というものは、私たちが今世紀、「悪魔の台所」へもたらしたのです。自立を始めている合理性の最たるものは、核爆弾です。(31)

エンデが繰り返して強調する「第三次世界大戦」の解決方法として、「とどのつまり、私たちは社会的破局と環境問題的破局、この二つから一つを選ばざるを得ない」(32)状態にまで我々が追い詰められていることをエンデは強調している。また、このことに関連して彼はこのメルヒェンを読むであろう子どもたちに対する憂慮を以下のように語っている。

ドイツで実施された四千人の児童を対象としたアンケートを読んだことがあります。[...] 子供たちの答えは、私を震撼させました。子供たちが自分たちを待ち受けている未来をなんとはっきり意識していることか！その未来像は、例えば人々は地下室や地下鉄の構内でなければ生きることができず、太陽の下に出られない。それはオゾン層が破壊されているから、そして宇宙線が私たちや私たちの遺伝子を傷つけるからというものでした。子供たちは、自分たちが大人になり子供をもつようになるころには、おそらくドイツの森は全滅していて、その結果として気候が変化することをよく知っています。子供たちは部分的に砂漠化した地域が出てくることを知っているのです。(33)

また、エンデは環境問題のような目に見える形の現代社会の問題点だけではなく、人間の心の荒廃についての現状を指摘している。

私たちは、核爆弾に脅かされた世界に生きています。独裁者や強制収容所が存在し、そして、これからも存在する世界に生きています。そこにはまた社会的な不正や搾取が存在し、攻撃性や残酷な行為、麻薬の乱用やさまざまな心の荒廃が日々増えているように見える世界に私たちは生きている

のです。—そこでは芸術や詩が、まさにこの両者が、各々の道徳的な使命を免れるのでしょうか？（免れるという答えを）おそらく本気で言うことはできないでしょう！それでは、まさにシニカルなものだ！ […] 私たちはイデオロギーの世界に生きています。この世紀においては、だれもが自分の意見や立場を他者に押し付け、説き伏せ、論じ伏せようとしています。(34)

このような現状にあって、エンデは人々の心の変革を訴え、人々の心の荒廃を直すために「芸術や詩が治療の課題を持っている」(35)ということを強調している。「逃避文学的」と非難される原因となった『モモ』などの作品に見られる「道徳的に抽象的」な態度、言い換えれば「芸術や詩」の重要性を強調してきたエンデではあるが、人々の心の荒廃を読者に直接意識させるべく、『魔法のカクテル』においては異例ながらも直接的に現代社会の抱える問題点を作中に指摘したのである。しかしながら、先述のように、これらの問題を解決するためには困難がつきまとうことは、モーリッツとヤーコブに奇跡を起こして欲しいと懇願された聖ジルヴェスターが以下のように彼らを説教することばかりも垣間見ることができるのである。

「奇跡がこの世の秩序を破棄することはない。奇跡は魔術ではない。奇跡はより高い秩序から生じるものだ。奇跡というものは、狭いこの世の分別では理解できないのだ……」
(WP S. 186)

ここから読み取れることは、環境問題などに対応する即効性のある「奇跡」は現実の世界には存在していないことである。これは、エンデの現実世界に対する態度と考えても良いだろう。従って、具体的に社会の諸問題を提起したエンデではあるが、救済の具体的な方策に至っては、「奇跡」を持ち出した点ではやはり「道徳的に抽象的」な態度を示さなくてはならなかったのである。だが、それは現実世界の問題を解決するための「奇跡」は存在しないことを訴え、人々の「心の荒廃」に対する「心の変革」の重要性を、エンデは強調したか

ったと考えることができるのである。

テキスト

Michael Ende : *Der satanarchäolügenialkohöllische Wunschpunsch*. Stuttgart, Wien, Bern : K.Thinemanns Verlag, 1989.

ここよりの引用は略記 (WP) とページ数を引用の後に記した。

注

- (1) Hermann Bausinger : Momo. *Ein Versuch über politlitterarische Placeboeffekte*. In : *Literatur in der Demokratie. Für Walter Jens zum 60. Geburtstag*. München : Kindler Verlag, 1983, S. 142.
- (2) 子安美知子 : 『エンデと語る 作品・半生・世界観』朝日新聞社 1986年 62ページ
- (3) 同上 21 ページ
- (4) 同上 62 ページ
- (5) Winfred Kaminski : *Einführung in die Kinder- und Jugendliteratur. Literarische Phantasie und gesellschaftliche Wirklichkeit*. 4. Auflage. Weinheim/ München : Juventa Verlag, 1988, S. 42
- (6) Michael Ende : *Der Niemandsgarten. Aus dem Nachlass ausgewählt und herausgegeben von Roman Hocke*. Stuttgart/ Wien/ Bern : Weitbrecht, 1998, S. 5
- (7) Michael Ende : *Michael Endes Zettelkasten. Skizzen & Notizen*. Stuttgart/ Wien : Weitbrecht Verlag, 1994, S. 56
- (8) Vgl. Ende : *Michael Endes Zettelkasten*. S. 186
- (9) Vgl. Ebenda S. 168
- (10) Ebenda S. 98
- (11) Ebenda S. 155 f.
- (12) Ebenda S. 181
- (13) Erich Kästner : *Kästner für Kinder*. Band 1, Zürich : Atrium Verlag, 1985, S. 355
- (14) Ebenda S. 415
- (15) Ebenda S. 416
- (16) Ebenda S. 417
- (17) Erich Kästner : *Kästner für Kinder*. Band 2, Zürich : Atrium Verlag, 1985, S. 226

- (18) Ebenda S. 241
- (19) Ebenda S. 287 f.
- (20) この作品タイトルの内, „*satanarchäolügenialkohöllische*“ の部分はエンデの言葉遊びによる造語である。この言葉は, **Satan** (悪魔), **anarch** (無法状態の), **archäolog** (考古学の), **Lüge** (嘘), **genial** (天才的な), **Alkohol** (アルコール), **höllisch** (悪魔のような) という7つの言葉から成り立っている。本稿では訳書に倣って作品名は『魔法のカクテル』としている。
- (21) 初稿は1976年に完成している。また, ドイツで発表されるよりも早く1978年に日本で紹介されている。参照 子安美知子・堀内美江:『エンデの贈りもの』河出書房新社 1999年 103ページ以下
- (22) Roman Hocke/ Uwe Neujahr: *Michael Ende. Magische Welten. Deutsches Theatermuseum München/ Henschel Verlag, 2007, S. 174*
- (23) Ebenda S. 171
- (24) 「全くのナンセンス男」の意 („*Irrwitz*“ 「全くナンセンスという名詞」から)
- (25) 「女暴君」の意 („*Tyrannin*“ という同義の名詞から)
- (26) 近藤悟:『「鼠捕り男 ハーメルンの死の舞踏」について—M・エンデの資本主義批判』関西学院大学文学部『KG ゲルマニスティク』第11号 2007年
- (27) 河邑厚徳・グループ現代:『エンデの遺言「根源からお金を問うこと」』日本放送協会 2000年 14ページ
- (28) 「皆伐」の意。戦後総決算の意味として。戦後流行した言葉でもある。
- (29) Joseph Beuys/ Michael Ende: *Kunst und Politik. Ein Gespräch. Wangen: Freie Volkshochschule Argental, 1989, S. 36*
- (30) Klaus Berger: *Michael Ende. Heilung durch magische Phantasie. Wuppertal: Verlag und Schriftenmission der Evangelischen Gesellschaft für Deutschland. 1988, S. 75*
- (31) Ebenda S. 8
- (32) ミヒャエル・エンデ 河邑厚徳:『NHK アインシュタイン・ロマン 第6巻 エンデの文明砂漠』日本放送教会 1991年 17ページ
- (33) 同上 15ページ
- (34) Ende: *Michael Endes Zettelkasten. S. 189 f.*
- (35) Ebenda S. 190